

# 植民地時代末期鄭寅燮<sup>チョンインソプ</sup>のヨーロッパ旅行記 ——世界体制の変動と西欧視座の変更の断層

漢陽大学校 <sup>チャヘヨン</sup> 車恵英

## 1. 問題提起

本稿は、鄭寅燮〔訳註：1905～1983。詩、戯曲、英文学、民俗学、言語学などの分野で活動〕の日帝末期のヨーロッパ旅行記を対象とした研究の草稿である。鄭寅燮は1936年8月、デンマーク・コペンハーゲンで開かれた世界言語学者大会に参加したのちヨーロッパ地域を旅行し（1936年8月～9月、およそ1～2ヶ月）、帰国後いくつかの雑誌に紀行文を残した。

鄭寅燮は1905年生まれで、1926年に早稲田大学英文科に入学後、1929年に帰国し、延禧専門学校の教授を務めている。1936年8月の世界言語学者大会は、延禧専門学校教授として在職中に行われたもので、この当時、彼はハングル学会（1930）〔訳註：原文ママ。1930年当時の同団体名は「朝鮮語研究会」、1931年に「朝鮮語学会」に改称。現在に至る「ハングル学会」と改称されるのは1949年。〕、朝鮮民俗学会（1932）、朝鮮音声学会（1935）に加入しており、海外文学派として活動していた。デンマーク・コペンハーゲンで開かれた世界言語学者大会は、彼のこうした朝鮮音声学会や海外文学派の活動と関わっていると言える。これまで鄭寅燮についての研究は、主に民俗学研究、海外文学派および翻訳活動の意味について研究したものが主流を成している。

本稿は、韓国近代海外紀行文研究という筆者の研究テーマの一部として行われる。鄭寅燮の文章のみならず、大多数の韓国近代海外旅行記が問題含みであるのは、世界を旅行し、記録した文章が、事実（体験）、記録（私的記録、公的発表）、近代大衆言論メディア、メディアが置かれた政治的・資本的意味網から、緊密に影響を受けているためである。特に近代は、国家間の資本主義システムとしての世界体制の下、帝国と植民地の再調整、2度の大戦を通じて多様な新生独立国が出現した時期である。この過程で、国境を越える旅行はそれまでとは違い、交通、通信、情報の素早い交流、確実な境界と遮断（国籍、旅券、税関、入国審査……）、そこに連累する国際的力関係の再調整がくり返される時期でもある〔訳註：原文ママ〕。この点で、植民地朝鮮人の海外旅行と、それについての言論メディアを通じて共有された記録は、逆説的に、私的な体験と文章自体を貫く公的・集団的事実、公共メディアを通じた大衆知の複合的連累、その連累の過程の中で基底に置かれた世界資本主義システムと植民地の選択をめぐる、集団的・個人的アイデンティティのあらしいの場としての姿を、それが生まれた時点から如実に表していると言える。

この点で、鄭寅燮のヨーロッパ旅行記が問題含みであるのは、1936年8～9月という旅行体験の時点と、それが掲載された時点（1937～1941年）<sup>1</sup>の間に横たわる差異のためである。彼の体験

1 1次：『四海公論』（1937年1月）——エジプト（1回）、『三千里文学』（1938年1月、4月）、『三千里』（1938年10月）——アイルランド（3回）／2次：『朝光』（1939年8月～1941年1月、全10回）、『文章』（1940年5月、1回）

と記録は、1. 日中戦争以前の体験、2. 日中戦争以後の記録(の試みと失敗)、<sup>2</sup> 3. 第二次大戦期の記録に分けられる。このうち最も多くの量を占める第二次大戦期、1940年の記録は、実際の旅程の順序と異なり、ドイツのポーランド侵攻に始まる北ヨーロッパへの攻撃と征服、パリ陥落など第二次大戦の進行順序に従って文章が掲載されている。ベルリンから始まり、ヨーロッパ進軍の旅程を通してイタリアを到達点とする旅行記の『朝光』誌での掲載順序は、3国(ドイツ、日本、イタリア)の枢軸国同盟の精神を基底としている。さらに問題となるのは、このヨーロッパ旅行記の大部分が4. 1960年に『世界文学散考』〔訳註：韓国語原稿では『세계문학 산견』(世界文学散見)となっているが、原書名は『世界文學散考』(ソウル：東國文化社、1960年)である〕という単行本として刊行されたことである。解放後に刊行された本では、『朝光』誌の旅行記に対する一部修正、弁明、削除、記憶違い(資料の不在)、掲載されなかった旅行記の復元が行われてもいる。

このように見るならば、彼の旅行と記録(1936年／1937～1938年／1939～1941年／1960年)は、韓国近代が直面した世界体制と帝國的・国家的変動の重要な分岐点において行われたと言える。この時期の韓国文学と歴史の研究は、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争へとつながる一連の戦争、そのなかでの韓国と日本を主とした関係、およびそこでの韓国人の選択の問題に集中している。この場合の韓国史や韓国文学の研究では、日本を(ほとんど唯一の)相手であり、定数とする問題枠組みが設定されてきた。しかし、日本もまた事実上、国際政治の力学の中でのひとつの変数、国際関係の中に連累する一部だったと言える。共に連累する関係、国際政治の中の場の規定性は、近代を通じて、たとえば1920年代の社会主義や1930年代のコミンテルンはもちろん、第一次大戦後の世界改造の流れやワシントン会議などがもたらした民族主義陣営の期待と挫折など、つねに韓国近代史を貫いている前提だったと言える。

特に、植民地時代の韓国人の場合、この世界体制、世界情勢を見る視座の設定において、世界の方から日本を相対化する時期、反対に、世界の地域分割の中で日本とひとつのグループとなることを選択する時期とに分けられると言えるが、鄭寅燮の旅行記が書かれる上の時期は、この視座の変動、それを強いた世界の客観的情勢の変動が成された時期だったと言える。彼の旅行記が扱うヨーロッパは、その変動の日常的、局地的、境界的な姿を断層的に示していると言える。

## 2. 旅程と掲載順序

### 〈旅行順序〉1936年

朝鮮→未記録旅程(推定：ソ連、ポーランド経由)→ベルリン(8月21日到着)→デンマーク(8月25日到着)→イギリス(9月2日ロンドン到着)→アイルランド(9月7日到着)→[スコットランド(ウォルター・スコット、スティーヴンソン記念館)→イギリス・湖水地方のワーズワースの墓、シェイ

——ベルリン、パリ、デンマーク、スイス、フィンランド、イタリア

2 旅程と日付の上では明らかに存在するが、日帝末期当時には発表されなかった旅行地域がある。これは1960年に復元される。

クスピア生家(9月12日)]→パリ(9月12～17日)→スイス(9月17日)→イタリア(9月18日到着)→アテネ(9月21日)→エジプト(9月24日)→帰還予定(アデン湾、スエズ運河と予告)

〈掲載順序〉1937～1941年

エジプト(『四海公論』1937年1月)―アイルランド(1938年、3回)―「英国文壇巡礼記」(未完1回、『朝光』1938年5月)―「伯林記」(ドイツ、『朝光』1939年8月)―「巴里の追憶」(〔訳者補:『朝光』〕1940年3月、4月、5月の3回)―ヴァイマル市(ドイツ、『文章』1940年5月)―「丁抹視察記」(デンマーク、『朝光』1940年7月、8月)―「瑞西の自然と人文」(スイス、『朝光』1940年9月)―「伊太利訪問記」(『朝光』1940年11月)―「羅馬の印象」(ローマ、1940年12月)―「ポンペイの感傷」(『朝光』1941年1月)

### 3. 分析と再構成——3つの記録の重ね読み

#### 1) 1938年——『三千里』とイギリス、アイルランド

イギリスとアイルランド地域は、10日間(9月2～12日)ともっとも長く滞在した地域だった。英文学研究者という点で、愛情と感動が色濃くにじんだ詳細な文芸紀行の性格を見せている。旅行の順序上はベルリン、デンマークなどの北ヨーロッパが最初ではあるが、帰国直後にまず発表した(1938年、『三千里』3回―アイルランド、『朝光』1回―イギリス)のもこの地域の文芸紀行である。

##### (1) アイルランド

貧しい田舎のようなダブリンと富裕な北部のイギリス領、新生の活気と文学・演劇運動の情熱があふれる独立国家アイルランドと、富裕だが頹廃と誘惑があふれる北部イギリス領の対比、2つの地域間の貨幣の不通、郵便システムの不通、憎悪が日常化した分裂。

##### (2) イギリス

『朝光』に「英国文壇巡礼記」というタイトルで、「続」を予告し「巡礼」を約束したが、この約束は守られなかった。1938年5月(「英国文壇巡礼記」)と1939年8月(「伯林記」)の間、彼が期待し、愛し、野心を持って準備した英文学の故郷巡礼は中断され、1960年代に刊行された『世界文学散考』で詳細に復元された。

#### 2) 1940年——『朝光』10回、『文章』1回:北部ヨーロッパドイツの征服地

##### (1) 脱ヴェルサイユ体制、ドイツのヨーロッパ征服と三国同盟の精神地理

・『朝光』1938年5月(「英国文壇巡礼記」)が中断され、新たな連載が始まった1939年8月(「伯林記」)の間、1年3ヶ月の時間がある。その時間には、公的には1938年の武漢三鎮陥落とともに日中戦争が本格化し、東亜新秩序建設が発表される。1939年8月、独ソ不可侵条約が締結されるとすぐさまポーランド侵攻により、再三予告されてきたヨーロッパ戦争が始まる。鄭寅燮個人

としては、1939年6月に皇軍慰問団として渡支〔訳註：中国派遣〕使節の送別を皮切りに、各種文人協会、懇談会を通じて時局協力が始まる時期である。

・1939年の「伯林記」を皮切りに、1940年の1年間ほぼ毎月連載したヨーロッパ紀行文のもっとも大きな特徴は、文章を書くこと自体が複層構造ということである。詳細な旅程——到着、大使館、総領事館、日本人会館訪問、宿の交渉、交通手段、観光案内地図の購入、観光地訪問、出会った人、観察した事実、国境警備の各種制度の通過……——は、旅行当時の日程を記録している。

ところが、彼が旅行した観光地、訪問した名所についての感想は、文章を書く現在の感想で占められている。具体的に、パリで博物館や美術館を見たはずであるものの、彼が注意深く書いているのはヴェルサイユ宮殿の鏡の間（第一次大戦の講和条約締結の場所）と、その条約の無価値さに対する嘲弄、貞操帯があるクリュニー博物館、そして夜の街の客引き女性たちの話が主である。スイス・ジュネーヴの美しいアルプスの湖畔は、国際連盟の衰落とその価値への誹謗によって横領される。そうして、一連のヨーロッパ旅行記はヴェルサイユ平和体制に対する終末宣言と、新たな秩序としてのヒトラーのファシズムの到来、頹落と腐敗によって没落が差し迫ったパリと、台風の目のようにひっそりとした新秩序の胎動地域としてのドイツ、そして日常的な愛が芽生える静かな風景のイタリアで締めくくられる。

3) 1960年『世界文学散考』——修正、弁明、復元、記憶違い——解放と国家樹立以後の視座の調整

(1) 修正、弁明——第二次大戦期『朝光』所載の日本的親縁性に対する修正と弁明

1960年に刊行された『世界文学散考』には、『朝光』所載の紀行文を修正した部分が主に登場する。

(2) 削除——フランス・パリの1940年4月分全体が削除されたまま単行本化

(3) 復元——文学自体、西欧文化の期限

・イギリス：当時書かれなかった英文学の故郷巡礼は、1960年の単行本に掲載。スコットランドでのウォルター・スコットと、小説家スティーヴンソンの史跡地、シェイクスピアの生家、湖水地方の文人たち、等／英連邦国家が見せる極度の利潤追求行為に対する批判、および貧しいヨーロッパ人たち、観光資本化された文学記念物とその運営システムについての詳細な記録

・ギリシア：西欧文化の源泉、本場を訪れたいという切実さと高揚感が基本的情緒。「私は、私が生涯憧れてきたギリシア訪問の決勝点に立ち立ったわけである。非常に胸が高鳴り、頭が異様なほど緊張する」。新しく作られた道路を見ながらでも、「新たに躍進しようとするギリシアの一面」を推測している。

(4) 記憶違い、あるいは資料の問題

・ポーランド——侵撃された弱小民族の運命、連帯と愛情

#### 4. 1930年代後半以降の貫流する世界体制、国家間資本主義システムと文学の位置取り

先の『朝光』誌の1940年の文章は、主に第二次大戦時のドイツの征服地域に従った順序と、その基底にあるファシズム勢力、すなわち日独伊三国同盟の視座を基盤としていると言える。そしてこれは、観光地や記念物についての「感想」、すなわち鄭寅燮の1940年の主観的感想が、公的であり政治的な心象地理と結合するやり方なのであろう。

一方、彼の旅行当時の事実の記録(観察、経験したこと……)は、別のやり方で、当時の世界情勢の変動と実際、それが「世界」と「日常」にもたらす変化を示している。極めて個人的な体験の記録が、大恐慌以後、ファシズム期、保護貿易下のブロック経済時代の国家間資本主義システムのありようを示すような旅行の記録となっていると言えるだろう。

##### 1) 大恐慌、ファシズム、保護貿易下ブロック経済時代の国家間資本主義システム

・旅行券検査、入国手続、クックやアメリカン・エクスプレスなどの世界的観光旅行社、宿泊、税関、両替、荷物検査……

・個人旅行者の世界観光旅行、それが可能なシステムと境界、個人の次元、観光システム、国家間システムを詳細に示している。この詳細さは、韓国近代の海外紀行文のなかで鄭寅燮の旅行記のみに見られる特徴である。これはおそらく、彼の旅行がガイドのいない一人旅であり、留学ではなく短時間の間に行われた純粋な観光旅行であるという点、言葉ができたという点、そして1936年という時点、ブロック経済および保護貿易主義下で、両替と物流などが厳格化していた当時の世界情勢の変貌などが連累したものだと言える。

例)〈税関検査——イギリス〉

「鞆という鞆は奥の奥までみんな開けてみて、外国の品物として商品化されるおそれがあるものは徹底して審査し、定価の半額をいわゆる輸入保証金として没収させている。そこには個人の事情などありえない。自分の国の商品と貿易を保護するために、イギリス人ほどひどい振る舞いをする国民もなさそうである。[……]私はカメラと望遠鏡に4ポンドを支払った。」(「英国文壇巡礼記」『朝光』1938年5月)

##### 2) 巨大都市の世界的同時性——カフェー、ダンスホール、夜の遊興街の誘惑

パリ、イギリス領北アイルランドのベルファスト、ベルリン、ローマのどこでも、夜の街の娯楽文化と、カネのある東洋の観光客に向けて誘惑する街の女性たちは、鄭寅燮が「うんざりするほど」あふれている。こうした資本主義都市の夜の街の快楽、誘惑、頹廃は、1930年代中盤、大衆総合誌を通じてすでに京城と東京、上海とハルビンを対象に、反復的に表象された内容である。実際、「モン・パリ」のレビュー公演などは京城、東京、上海でお馴染みとされていたものであり、鄭寅燮の旅行記はこれをパリで見て反復、記憶している。

「パリでいちばん繁華な一帯だという「イタリアン街」〔原文ママ〕、「サン・マルタン」、「レピュブリック広場」、「バステューユ広場」〔……〕大商店、大会社、大食堂、大カフェー、大娯楽場など言うなれば東京の銀座と浅草を合わせたような所で、京城で言えば鍾路通りや本町通りのような所である。」——〔訳者補：『朝光』1940年5月、〕249～250頁

これは、世界の巨大文明の揺籃として表象されていた地域が、資本主義都市が持つ下層の大衆文化の世界的同時性によってその表象が変更される状態をよく示していると言える。これを通じてヨーロッパは、カネで購入可能な、どうということのないパリ、ベルリン、ローマ、スコットランドへと転換する。ここには明らかに、大恐慌を経験しているヨーロッパ、満洲国樹立後の恐慌から回復している(するだろう)東洋の旅行者、という視座の設定がにじみ出ている。すなわち、既存の西欧文明の地と東洋の旅行者が、観光客と観光地という視線から、購買者と販売者へと再配置されているのである。この再配置には、先に言及した1930年代中盤を起点とした世界の変動(恐慌とブロック経済化)、満洲景気についての報道などを通じて増加した朝鮮人の経済的楽観主義、ブロック経済下の世界の中で朝鮮が日本とひとつにグループ化される位置の変動など、重層的機制が横たわっているだろう。

3)市場・国民国家・文学(芸術)の三角形——資本主義観光システムと国家的記念物としての文芸

3つの記録を通じて、彼が個人的に関心を傾ける重要な軸は文学である。新しい地域に行くたびにいつも、学芸紀行、文芸紀行、文学紀行の性格を再確認しながら旅程を計画し、記録している。ところで、この記録の緻密さは、国民国家と資本主義の中で文学がどのように記念物として、商品として、地域の財産として存立しているかを詳しく明かしている。(記念館の場合——入場券、ガイド、遊覧巡回バスの運営、生家博物館の造成の過程、記念物の配置、記念品販売所……／国家記念像の中に配置された文人墓地と公園化、国家資産であり地域資産としての役割など)

## 5. 始まりと終わり——ヨーロッパについての公的心象地理の変動の諸断層

・植民地時代末期、彼の旅行記に見られるヨーロッパは、1929年以後米国にはじまり世界を覆った大恐慌の後遺症がヨーロッパを占領している時代、<sup>3</sup> ムツソリーニとヒトラーのファシズムが経済的成功と人気を謳歌し、希望のアイコンとして存在していた時代のヨーロッパである。世界の有名観光地、巨大都市を訪問するなかで出会うのは、歓楽の夜の文化、施しを求める物乞いたちだった。期待を抱いて訪れた文学記念館、作家の生家は美しいが、感じの悪いチップの要求、観覧バス運

3 韓国近代の旅行記で、「貧しいヨーロッパ人」が書かれたのはこれがほぼ唯一と言える。

用上の利潤追求、案内のガイドとの応酬、施しを求める物乞いが一緒になった、「文化とは距離が遠い風景」である。特に、保護貿易主義下で極度に厳格な税関検査、ブロック経済下で自国の貨幣流出を禁止する両替所など、世界経済が共通して直面している大恐慌の後遺症、ファシズムと保護貿易主義、ブロック化した経済圏域の中での国境警備システムの偏差などが見えてくる。

・ところで、鄭寅燮の旅行の終わりであり、旅行記が始まる地点(エジプト)、感動し、書きたかったが書けなかった場所(ギリシア)、彼がいちばん最初に書きたかった場所(アイルランド)、これらの国(ギリシア、エジプト、アイルランド)は事実上、第一次大戦以後に独立した、ヴェルサイユ平和体制の産物である。<sup>4</sup> こうした国々に対する愛情と期待と憐憫が混ざった旅行記は、韓国で 1922～1929 年頃に多く生産された。<sup>5</sup> これらはヴェルサイユ体制、およびワシントン体制が維持され、日本が国際協調主義を基調とした外交政策を維持していた時期、そして「世界の大勢が世界改造の流れの中にある」という、世界の進歩と弱小民族の未来に対する楽観の感覚が——改造論と大正デモクラシーとともに——植民地朝鮮内の知識言説の基底をなしていた時期の産物である。この点で、鄭寅燮が文章を書く始まりの地域は、それまで持続してきた心象地理(西欧文化の進歩的楽観性への信頼と、世界の弱小民族に未来への信頼)の延長線上にあると判断しても良さそうである。

・しかし上で見たように、1938 年 10 月、イギリス領北アイルランドについての『三千里』の紀行文、『朝光』、『文章』など主に 1940 年代に書かれた文章は、先に見た通りの状態である。すなわち、旅行記として書かれる(公的に共有されえた)文章は、ヴェルサイユ平和体制の虚構性を攻撃・嘲弄し、ドイツ、イタリア、日本の 3 国枢軸国同盟の精神的な心象地理を基底としている。彼の文章は、この変更の瞬間を断層的に保存しており、大韓民国樹立後、今ひとたびの断層を見せているのである。

※本文資料、『世界文学散考』での修正箇所例は筆者の要請により省略

(相川拓也・訳)

---

4 特にアイルランドが注目されたのは、第一次大戦の敗戦国の植民地ではない、戦勝国の植民地だったにもかかわらず独立した、という困難な過程を経てきたためである。鄭寅燮は『三千里』で、当時誰よりも詳しくアイルランドを観察している。

5 この時期の『開闢』の海外記事の相当数も、これらの国々を扱っている。